

京都大学	博士 (教育学)	氏名	元木 幸恵
論文題目	動機のないまいをめぐる心理臨床学的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、動機のないまいについて、心理療法を受ける際のクライアント (以下 CI) に着目し、どのような役割をセラピスト (以下 Th) が果たすことによって彼ら/彼女らとの心理療法の歩みを進めていくことができるのかについて探索的に明らかにすることを目的としている。</p> <p>論文の構成は、序章と終章を合わせて全 9 章からなり、3 部構成としている。第 1 部には、Th 役割を先行研究から導き出す文献研究としての第 1 章、スーパーヴィジョン (以下 SV) 体験からのまとめを行った第 2 章からなる。第 2 部は、質問紙と投映法による基礎研究である第 3 章、第 4 章、そして第 3 部として心理療法による事例研究を通して考察をすすめる第 5 章から 7 章によってまとめられている。</p> <p>まず序章として筆者自身の経験も交えながら、動機のないまいな状態の心理療法やその導入に活用される心理検査に関する CI 側の目的のないまいについてまとめている。必ずしも CI が心理療法の動機を明確に言語化することができないという可能性を念頭に、動機のないまいな心理療法の困難さを乗り越えるために Th が果たす役割について検討することの意義について提起した。</p> <p>第 1 部第 1 章は、心理療法における動機に関する文献研究である。Freud, S. (1905) が『精神療法について』で述べているように、CI が心理療法を受けたいと思う動機について明確にしておく重要性が指摘されている。さらに導入期に実施される心理検査においても、CI はその目的のないまいまま受検していると推測された。よって検査後のフィードバック面接が、心理療法への動機づけとして機能する可能性が示唆された。また、CI が動機について語るができないという問いに迫るため、現代の青年期臨床を通して探究していくと、葛藤や悩みを心的に抱え自らについて模索する青年期の試みから撤退してしまっている様相が明らかになった。これらの特徴について、養育者から感覚や情緒を否定せずに受け止めてもらえる「受容」の体験が重要であるという発達心理学の知見を紹介した。さらに、本論文における動機のないまいな CI を、苦痛や苦悩を言葉にすることが苦手で、他者に対し支援を言葉で適切に求められない人たちであると定義した。第 2 章では、心理療法を受ける動機のないまいなどの Th の役割をより詳らかにすべく、スーパーヴィジョン (以下 SV) からの考察を試みた。まず SV の目標として、主体性の獲得、情緒体験、CI 理解の 3 点があげられ、この 3 点が具体的にはどのように見出されるのかについて、筆者自身の体験をもとに検討を行った。結果、主体性の獲得に関しては受容的な関係を基盤とした SV において、セラピーに生起する転移を扱うことによって、初心のスーパーヴァイザー (以下 SVee) が主体的になり、情緒体験を持つことが可能となると考えられた。加えて CI 理解については、北山 (2005) による共視論からの考察を試みた。母子に生起する共視のように、SVee とスーパーヴァイザー (以下 SVor) が感じ、考えたことについて言語的、非言語的なやり取りを行うことが SVee の CI 理解を促すと考えられた。そしてこれが、動機のないまいな心理療法における Th の役割へ転換できる可能性を述べた。</p> <p>第 3 章および第 4 章からなる第 2 部では、本論文で扱う支援や援助を適切な形で求めにくい青年たちのコミュニケーションについて、大学生を対象に基礎的な研究を行った。第 3 章では、他者や自己への信頼感を含んだ概念である共同体感覚に着目し、高坂 (2011) による尺度と自作の劣等感尺度を用いての質問紙調査から、他者への信</p>			

頼感が乏しいと考えられる、劣等感が高く共同体感覚が低い劣等コンプレックス状態の男女3名に対し、TATを施行した。第4章では、自尊感情尺度と自作の不安尺度を用いて質問紙調査を行い、自尊感情が低く不安が高いと考えられた6名にロールシャッハ法を施行した。以上から、人間関係において自ら助けを求めにくい青年が示すコミュニケーションの特徴や他者に対する振る舞いの一端が明らかとなった。

続く第3部では、著者による心理療法事例を提示することによって、Thが果たす受容と共視の役割がどのように働くのかについて検討した。第5章では、来談当初、主体的に自らの問題に向き合おうとする姿勢はあまり見られなかったCIに対して、ロールシャッハ法をはじめとする心理検査によって理解された内容をもとに丁寧なフィードバック面接を行うことで、あいまいな対象をめぐる言語的、非言語的なやり取りとなり、CIとの間で共視の役割を果たした。さらに情緒に触れることへ恐れを感じるCIに対しては、ある程度の受容する期間が必要であると主張した。第6章では、学生相談における事例について、自発的に申し込みはしたものの、自発的な語りが難しく、聞かれたことのみに応答していたCIをとりあげた。あいまいな動機のままThが抱えておくことによって、侵襲的になりすぎないようにかかわった結果、問題解決を押しつける母親とは違う対象としてCI自身がThを感じられるようになっていった。Thが面接室で感じた「息苦しさ」とCIの連想が重なり、それを共視することで、本人が相談室を利用しようと思うに至った、あいまいな動機についてのやり取りが可能になった。さらに第7章では、2つの中断事例をもとに、初心Thが陥りがちな「早計な受容」と「押しつけがましい共視」について考察を行った。早期にCIの痛みや苦しみがわかったような感覚になることを「早計な受容」と見なした。早計な受容に陥らないために、わかることができない対象を引き受ける一定の期間が必要であり、Thや心理療法に対するネガティブな情緒を丁寧に扱うことによって、初めて受容できると述べた。また、長年にわたって抱えてきた問題について、Thによる「精神分析的な心理療法を実践することでCIの現状を改善したい」という動機を押しつけ、心理療法の導入期において、CIが最初に見ようとするもの、すなわち動機をThから無理強いする「押しつけがましい共視」をThが行っていたと考えられた。ここから、まずはCIが持ち込んだ意識的な動機について、丁寧に検討する必要があると主張した。

これらをまとめた終章では、本研究の総括と今後の展望を示した。CIの動機があいまいなまま心理療法を受けようとする際に果たすThの役割として、「受容」と「共視」を挙げ、その2つの役割について改めて考察を行った。受容はただ単にCIの言葉を否定せずに聞くばかりではなく、CIを理解し受け止めようとする態度であり、Thのこのころの内で行われる試みであると整理した。Thのこのころの内では醸成されることでその効果が発揮される、きわめて受動的なかわりであることを明らかにした。また共視について、CIの意識的な動機を共有し、わずかにTh側による見立てを伝えることで、CIの無意識の世界を共に見つめることが可能となると述べた。加えて、Thが受容と共視の役割を果たすことによって、面接空間内にテンション（緊張）が生じ、第三主体としての心理療法を受ける新たな動機が生成される、弁証法的な機序について示した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の審査において、特に評価すべき点として次の3点を挙げるができる。まず、論文構成の緻密さと明晰さがあげられる。次に、初心の心理臨床家(セラピスト、以下 Th) かつ実践研究者として行った研究を含めた一連の研究素材を丁寧に振り返り、まとめて行く能力の高さである。最後に初心の Th として、動機があいまいなクライアント(以下 Cl) に抱く感覚のあいまいさに耐え、そこから臨床力の向上に努めていく様が見事に論文となって結実していくところである。

これらの特徴に沿って、本論文審査の結果をまとめていく。

冒頭にあげた論文構成について、3部構成として論文を明快にまとめようとした努力に加え、第1章、第2章での導入の巧みさを、高く評価できる。序章において述べられるように、多くの初心の Th にとって、セラピーの中断という経験の重なりは、苦痛な体験である。能力が高く、問題を迅速に分析できる体験を持ってきた者であるほど、そこで立ちすくみ、動けなくなることも多い。しかし本著者は、その体験を成長に結びつけるべく思考した結果を、第一部に研究としてまとめている。この問題の客観化をはかるために、先行研究の丁寧なサーベイによって、従来の Cl が抱く「問題の発見」→「心理療法への動機」→「心理療法」ということでは考えにくい現代青年の特徴を見出している。それは、むしろ「心理療法への動機」についてさえも、心理療法の中で Th と共に明らかにしたいと想う、漠然とした不安や防衛を抱えている様と理解できよう。次いで第2章で述べられたスーパーヴィジョン(以下 SV) 体験である。先行研究のまとめから続く心理療法の訓練に関する論考は、展開の飛躍イメージを抱かれるかもしれない。しかし Th が Cl と同世代であるがゆえに無意識的に理解でき、またそのあいまいさをみないままに過ごしてしまう Th 自身のところについて、SV によって丁寧に理解を進めて行くことで「客観化」を目指した点は、極めて高く評価できる。基礎訓練としての受動的な SV 体験ではなく、そこに何が生起し何に導かれていくのかについて、臨床力をあげていこうとする著者の意欲の高さが理解できる。これらの第1部の導入研究から「受容」と「共視」という本研究のキーワードを見出しており、論文全体の構成に大きな意味をもたらしている。

次にあげた基礎研究から事例研究への研究素材の流れと、活かし方である。第2部では、卒業論文から量的分析を行う調査研究と、心理検査を用いた質的研究を実践する中で培われた視点を活かし、新たに他者や自己への信頼感、共同体感覚、自尊感情というキーワードをもとに多角的な分析をすすめている。これらの基礎研究を通して、人間関係において自ら助けを求めにくい現代青年のコミュニケーションの特徴や他者に対する振る舞いの一端が明らかとなった。この青年たちが、過度に人に頼ろうとするか、人間関係から回避的になるかの両極を持つことを明確にした。以上の見解をふまえ、第3部では、著者の臨床実践経験をもとに、「受容」、「共視」というキーワードを据えながら、そのプロセスを読み解いており、著者の臨床家としての眼差しに読者が伴走しながら理解を進めていくことが可能となっている。

最後に、「心理療法の導入期における動機のあいまいさ」に関する極めて丁寧かつ多角的な臨床事例研究のまとめがあげられる。序章に述べられたように初心の Th として著者が経験する、心理療法の導入期での中断体験に着目し、そこから立ち上がりゆっくりと歩み出そうとする力が見出せる。特筆すべきは、第5章、心理検査のフィードバック面接における丁寧なプロセスの提示である。ともすると簡単に結果を伝えるのみにとどまってしまう可能性を持つ本面接を、心理療法の動機につなげるべく、丁寧にかかわった足跡が読み取れる。加えて第7章の「中断事例」を通してみた、「早計な受容」と「押しつけがましい共視」という視点である。心理臨床実践での体験から、あいまいさ、わからなさに耐えて抱えることの重要性を見出した著者

は、ただ「理解した」あるいは「理解したいと思っている」ことを性急に押しつけることで、先述の特徴を持つ青年たちは、Th 側に歩み寄るどころか、回避してしまうことに辿りついているのである。このような、心理療法プロセスの精緻な描写と丁寧な考察から、著者の卓越した臨床力と分析的視点の鋭さという点でも、本論文を高く評価することができる。

試問では、丁寧な研究の積み重ね、多角的な分析と、奥深い考察がなされていることについて、いずれの調査委員からも高い評価を得、上記の評価視点の合意を得た。その上で臨床事例にかかわる詳細な分析として、「動機のないまじさ」にまつわる不安や抵抗といった防衛の観点から考察をすすめることも可能であったことや、動機が明快であれば心理療法が滑らかに進むとも限らない点が指摘された。さらに基礎研究をこの臨床実践研究の前提としてつなげていく際の観点や展開について、さまざまな議論がなされた。そして、試問自体が、心理療法の導入の難しさについて、極めてレベルの高い意義深い討論となった。それゆえ、これらの議論は本論文の価値を損なうものではなく、むしろ心理臨床実践における重要な視点をもたらすものであった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年12月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年              月              日以降